

展覧会ステートメント

“Re : Reflection”

本展“Re : Reflection”は、東京の空の美しさに着想を得て、その光を絵画に映し出すことを試みる展覧会である。昼間の空が青く見えるのは、太陽光のうち特に波長の短い青い光が大気分子に散乱されるためだ。空の色は、物理現象でありながら、私たちの感情や記憶にも深く作用する。

また絵画が美しいと感じられる理由は多岐にわたるが、その一つに「色の美しさ」がある。色彩は、光の透過・吸収・反射によって生まれる。油絵においては、メディウム(展色材)で透明度を調整し、絵肌の深みを演出する。顔料は光を吸収し、残された波長を反射する。私たちはその反射光を網膜で捉え、脳で処理することで「色」として認識する。画家は、わずかな色の混合によってその反射と吸収を巧みに操る。例えば、赤にほんの少し青や黒を加えることで、色に奥行きという隠し味が生まれる。こうした光の物理現象を繊細に調整することこそが、絵画制作の醍醐味なのだ。現代ではスマートフォンの発光画面によって色を「知った気」になってしまいがちだが、絵画の光はもっと複雑で、深いものなのかもしれない。

絵画は光によって変化する。季節、天候、時間帯、設置場所によって絵肌の表情は刻々と移ろい、鑑賞者の心の状態や土地の記憶によっても意味も変化する。空から差し込む光が室内を満たし、絵画に反射し、それを鑑賞者が網膜で捉え、脳の内部にあるという心に作用する。(そして私たち人間もいつかは空へ還る^{*1}。) そんな一連の循環の中に、「空の絵画」を展示しようと思う。

出展作家の多田と谷口は大学時代の同級生であり、2020年から台東区にて共同でスタジオを構え、2年後には千葉県我孫子市へ移り、現在も同じスタジオで制作を続けている。単に制作を別々に行っていただけでなく、芸術祭^{*2}の企画・運営も共に行ってきた。しかし谷口は近々香川県へ移住予定であり、ここで暫しの別れである。多田は東京の美術界でまだ果たすべきことがあるそうで、もうしばらく我孫子に残る予定である。そして、この展示を最後に、Gallery 10[TOH]も長い休みに入るそうだ。

秋の空廓寥(かくりょう)^{*3}として影もなし

あまりにさびし

鳥(からす)など飛べ

— 石川啄木『一握の砂』

啄木は、広々として何も無い秋の空の寂しさに、せめてカラスでも飛んでいてほしいと願った。空は近代以降、心情を映す鏡ともなったのだ。私たち二人は鳥を飛ばすことはできないが、代わりにそこへ空の絵を添えたいと思う。そうすれば、別れの秋の寂しさも、ある種の美しさへと昇華されるであろう。

^{*1}…古代インドでは世界は四大(地・水・火・風)元素からなると考え、それらの元素から構成された肉体が減り、空(くう)に還ることを「四大空に帰す」と表現した。

^{*2}…多田と谷口は共同代表としてストレンジャーによりよく実行委員会を運営。主な企画に、「ストレンジャーによりよく」(2021年8月・石川県金沢市)、「うららか絵画祭」(2023年2月・東京都台東区)などがある。

^{*3}…廓寥の当時の読みは「くわくれう」